

眼科手術の名手が行き着いた、最高の眼科治療とホスピタリティ。

愛知県全域や岐阜からのアクセスも良いJR共和駅から徒歩1分の場所で、2021年7月に開院した「浅見眼科手術クリニック」。クリニック名に「手術」の字が入るのは珍しく、周囲からは「目の不調で気軽に来院したい人が抵抗を持つのでは」という反対もあった。院長の浅見哲氏がそれでも「手術」という文字にこだわったのは、「自らが積み上げてきた眼科手術の経験と技術で、ひとりでも多くの患者様を幸せにしたい」という強い思いがあったからだ。

浅見氏は研修医時代に、眼科手術のやりがいや奥深さに気づいたことから眼科医を志望。その後は一貫して手術を中心に眼科医としての経験を積み、最新の眼科治療を行う米国への留学も経験。大病院では医局長として、関連病院から依頼される網膜剥離や眼内炎などの緊急疾患や、増殖糖尿病網膜症、重症の眼球破裂などの手術に昼夜を問わず対応してきた。2016年には、県内有数の眼科専門病院である眼科三宅病院の副院長に就任。網膜硝子体疾患や、緑内障手術、角膜移植手術など、従来なら大病院や専門家と連携していた難しい手術も自らの手で行えるよう、術者としての研鑽を重ねてきた。

浅見氏が手掛ける手術は年間

でゆうに1000件を超え、勤務時代にも「眼科手術を通して患者様の役に立っているという実感があった」と話す。「当初はこのまま勤務医でもいと思っていたのですが、自分がいつまで眼科医として一線に立てるかと想像したとき、一人ひとりの患者様に対して、もっとできることがあるかもしれないと考えるようになりました。そこで、自らが理想とする眼科治療を実現しようと、クリニックの開院を決意したのです」。

そう話す浅見氏が目指したのは、手術を中心とする最高の眼科治療と、患者の心に癒しを与えるホスピタリティを両立させた眼科クリニック。手術に使用する3次元映像システムを始め、最新鋭の機器が導入されたクリニックの待合室には、ゆったりと座れる大きなソファやピアノが配され、心落ち着くアロマが香る。「手術を待つ患者様の不安を少しでも軽くするために、できることはすべてやろうと。ピアノはインテリアとして置いたものだったので、ある患者様の娘さんが『母の手術のお礼に』と私に演奏を聴かせてくださったことをきっかけに、今はその方や音大に通う学生さんをお願いして、ピアノの生演奏をBGMにしています」。

浅見氏が手掛ける手術は年間

そうした心温まるストーリーから始まったピアノの生演奏に、涙を流して聴き入る患者も多い。さらには、手術中の緊張をほぐすために患者の好きな音楽を用意して術中に流すなど、まさに一人ひとりの患者目線に立った医療とサービスを提供する。数多くの患者に等しく標準を持つ日本の病院やクリニックでは、医師と患者との間にある程度の線引きが必要になる。特に多くの患者を観る必要がある大病院などでは、個々の患者への対応に時間を割くことが難しく、患者の側からすれば医師の対応や説明が「上から目線」に感じられることも少なくはない。「私はずっと、上から目線の医療に違和感を感じていましたし、患者様にはこのクリニックに来て良かったと心から思っていたきたい。当院は手術を中心に行うクリニックなので、患者様ご自身に納得して手術に臨んでいただくことも大切。ですから手術や病状の説明には、視力の弱い方でもよく見えるように大きなモニターを使い、耳が聴こえにくい方の場合には特別な補助装置なども使って、分かりやすくご説明することも心掛けています」。

日本では失明原因の第1位と

CHALLENGER

ASAMI TETSU

浅見眼科手術クリニック 院長

浅見哲

1971年愛知県生まれ。1996年に社会保険中京病院で研修医としてキャリアをスタート。国立名古屋病院（現名古屋医療センター）眼科レジデント、豊橋市民病院眼科部長、名古屋大学医学部附属病院医局長、眼科三宅病院副院長などを経て、2021年に浅見眼科手術クリニックを開院。

The Extra Edge

世の中のトレンドをリードする話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介